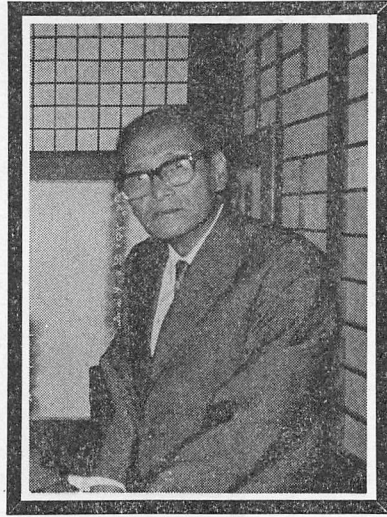


## 青木一郎氏をしのぶ

岩崎 鐵志



青木先生

昭和六一年正月は、あいつぐ悲報に江馬文書研究会は全く沈んでしまった。元且は渡辺公敏氏（岐阜県農業試験場）が、七日には青木一郎氏が逝去されたからである。

江馬文書研究会は、その発足が青木氏の大垣江馬邸訪問に始まり、当主の江馬庄次郎・寿美御夫妻の厚遇を得て、同家の文書記録を整理し、「江馬文書目録」（昭和五一年五月刊）、「江馬

家来簡集」（昭和五九年三月、思文閣出版）を刊行した。後者に所収した杉田玄白・前野良沢らの蘭学者の書状の翻字と原稿整理は、エーザイクすり博物館長青木允夫氏の支援を受け、毎月一回の研究会を同館でもち、始終、青木一郎氏のユーモアと漢学の素養に牽引されてやってきたといえる。

この刊行後も研究会を継続させ、「江馬細香来簡集」を編集してきた。これも本年中に刊行目処が立ち、その矢先きの悲報である。

江馬文書研究会の記念写真は何れをみても酒宴の姿である。そこでは斉藤信会長・江馬氏・青木氏を核にしての談論風発、とりわけ青木氏による医師・文士の行蔵を酒肴にした話題は、実に楽しい耳学問となった。

青木氏は就寝前にむすびを作って置き、払暁の執筆時にこれを食し、日常は週三回の診療に従っておられた。青年期の文学修業もあって詞藻に富み、かつ速筆であった。晩年の著作の刊行点数は驚くばかりである。

病床に就くようになって、大垣での研究会出席を口にされて御家族をあわてさせ、特に後嗣の青木靖医師に致命して、近親者により強て入院させられた。近代医学史上の医者 of 末期を挙げ、自らの入院を拒絶したという。

これをもって、近世医学史研究者らしいというべきか。現代医学への反措定というべきか。従容として死に就く、という古人の言が耳底に響く。青木一郎氏の御冥福を祈る。

追悼 中野 操先生

長門谷 洋治



中野 操先生

徳川撰三氏の首唱に呼応して、中野 操先生（一八九七—一九八六）が大坂に医史学普及を目的とした機関『杏林温故会』を創始、会誌『医譚』の刊行を始められたのは昭和十三年のことであった。それからほぼ半世紀。同二十四年には日本医史学会関西支部がその公称となったが、会の基本的な精神は創立期のままに維持された。ここを母体に多数の医学史研究者が育ち、貴重な業績が輩出した。集う者は幅広く、専門の史学者から一般市民にまで及び、集会のさいは石川・福井、愛知・岐阜、岡

山など広範囲からの参加者があり、先生はこの人的交流を重視された。

一方、中央との接触にも積極的で、時間的に制約されることので多い開業医でありながら、年末恒例の医史学会・蘭研の合同例会にはほとんど出席されたほか、東京などでの会合にも及ぶかぎり顔を出され、キャリアに富んだ先生ならではのアイデアと助言を惜しげもなく与えられた。もと軍医であった先生の姿勢は晩年にも至っても崩れることがなく、独特の雰囲気醸し出され、ハヒューラーVとよばれるのに相応しい風貌であった。

日本医史学会総会会長として大阪で総会をもたれること三度に及び（第五九回・昭三二、第六四回・昭三八、第七六回・昭五〇）、医史学会を地方でも開催する先鞭をつけられた。ライフワークの一に大阪蘭学史があるが、関西日蘭協会（松下幸之助会長）の理事として、同会に学者を入会せしめて、学問を通じての日蘭交流をはかられ、経済的色彩の強かった同会が学際的にも高く評価されるに至った。大阪蘭学史を集大成された『大坂蘭学史話』（昭五四）の他に、代表作として『錦絵医学民俗志』（昭五五）、『大坂医師番付集成』（昭六〇）、古西義麿氏が協力）があり、先生の最初の著作『皇国医事大年表』（昭一七）は戦後増補されて『日本医事大年表』（昭四七）となり、今日なおその価値が高いことは人の認めるところである。

四年に一度行われる日本医史学会総会が四月一日から開かれることに、レセプト作製の時期と一致する開業医の立場から、こ

れを少しうしろにずらすことを提唱して実現をはかられるなど、現場からの率直果敢な発言もなされた。一方毎度の大会にはご夫人が同席され、会計など事務面を担当され、お宅での診療にも協力されていた。持病であった糖尿病に高血圧を合併され、昭和六〇年一月に入院されたが、同年四月の先生の米寿記念を兼ねた関西支部の総会には出席され、元気な声で挨拶をされた。しかしこれが公式な席に出られた最後となり、昭和六一年三月二日死去された。享年八八歳。

### 追悼・三井駿一先生

宗田 一



三井駿一先生

関西の医史学界では、ここ数年の間に次々と重鎮の方々を失った。

・阿知波五郎（五八年二月二日、七八歳、本会名誉会員）

・山田重正（六〇年九月二日、八一歳、本会評議員）

・中野 操（六一年三月二日、八八歳、本会理事、関西支部

長）

・三井駿一（六一年四月一日、八〇歳、本会会員）

らの諸先生である。

三井駿一先生は、本年の広島での第八七回総会で一般口演を予定されていたが、それがはたされず本誌三二巻二号の口演予定抄録が絶筆となってしまった。

三井先生は、江戸期大坂眼科の名門三井家の後裔で、シーボルト事件で有名な土生玄碩は三井家第二代の元儒に学んでいる。

昭和四年、阪大医学部の前身、大阪医科大学を卒業、小児科を専攻し、一時期徳島医専の教授を勤め、阪大に戻ってからは三三年まで小児科助教授、のち国立大阪病院副院長を絶て国立大阪南病院院長、同名誉院長、帝塚山学院大学教授を歴任された。五二年春、勲二等瑞宝章受章。

先生は予科時代から中国語に親しみ、近代白話文学（口語文）に熱中したあと古典へと進んだ中国語の本格派で、語学好きは朝鮮語をマスターするほどだった。

「文字」を大切に考える先生にとっては、歴史研究が文字に

よる記録に頼る宿命をもつ限り、文字の意味することを正しく理解し、記録を正しく評価することが前提にあって、はじめて歴史研究の資料となし得る、とする立場を採っておられた。

この立脚点をもつ先生の医史学研究は、専攻する現代小児科学領域から問題点をつかんで古典を読むという歴史研究で、広い視野と緻密な考証をもって独自の境地を次々と開拓されて行つた。

その一端は、先生が五四年五月から五五年一月まで六回にわたって大阪府医師会主催で開催された「古代中国医学史講座」のテキストとして準備した、各誌発表の論考別冊を中心に合冊の『古代中国医学史話』（大阪府医師会刊、第二一回日本医学会總會記念頒布）からうかがえる。そのほかにも「医学史研究」などに発表された医心方小児科領域その他の手固い論考があり、この方面の研究者は、是非参照し活用してほしい。

いかにも小児科の臨床医らしい温顔の温厚なお人柄で、碩学ぶらない人格者だった。

先生の御冥福をお祈りする。

日程 理事・評議員会 四月二日(木) 午後五時〇〇分から

於 北里本館

講演

特別講演

秦佐八郎の生涯と業績

秦 藤樹

メランコリーの歴史

大橋 博司

会長講演

隋唐の医書に見られる

精神病とその治療

大塚 恭男

一般講演

四月三日(金)・四日(土) 午前九時より

總會、昼食

四月三日(金) 十二時〜一時

写真撮影、昼食

四月四日(土) 十二時〜一時

懇親会

四月三日(金) 午後六時三〇分〜八時三〇分

於 北里本館

会費・その他

参加費 五、〇〇〇円

懇親会費 六、〇〇〇円

記念写真代 一、〇〇〇円

総会および学術大会に関する問い合わせ先

〒一〇八 東京都港区白金五―九―一

北里研究所附属東洋医学総合研究所

医史学研究室内

第八十八回日本医史学会總會準備事務局

第八十八回日本医史学会總會(案内)

会期 昭和六十二年四月三日(金)・四日(土)

会場 北里大学E号館

〒一〇八 東京都港区白金五―九―一

☎ 〇三―四四四―六一六一